読売 教育ネットワーク

社会はまるごと学校――
すべての大人が先生です

Welcome to the world of parliamentary debating！論題が試合直前に発表される即興型英語ディベートの高校生全国大会が行われ、40高校が参加した（3月24日、25日、東京都内で／2・3面へ）

巻頭特集 日本高校生パーラメンタリーディベート連盟杯 全国大会

即興ディベート 英語とロジックの応酬 2･3

新企画
通信プログラム「新聞でチャレンジ！作文添削教室」 4
「楽しくNIE」教育面とウェブでスタート 5
イラストと記事で挑戦「新聞@スクール 月刊ワークシート」 6

編集と販売、一緒に授業 聖徳大付属女子中高 7

お知らせ 7　米ニューヨーク州立大学ジェネセオ校「居場所と成長の機会を与えてくれる音楽」 8

2018.4
Vol.40

巻頭特集

「政府」×「野党」 日本高校生パーラメンタリーディベート連盟杯 全国大会

即興ディベート 英語とロジックの応酬

時事問題などを高校生が英語で討論する「第7回 日本高校生パーラメンタリーディベート連盟杯 全国大会」（文部科学省など後援、メディアパートナー読売新聞社）が3月24日と25日、東京都内で行われた。対戦直前に論題が発表され、その場で政府と野党に分かれて競う即興型ディベート。1校3人のチームで地方大会を勝ち抜いた40校が参加し、渋谷教育学園渋谷高（東京）が優勝した。

さいたま市立浦和高

渋谷教育学園渋谷高

渋谷教育学園渋谷高が優勝

25日の決勝は対照的な2校がぶつかった。じゃんけんで「政府」となったのは海外在住体験がなく、部活で英語とディベートを鍛えるさいたま市立浦和高（埼玉）。一方の「野党」、渋谷教育学園渋谷は帰国子女らを擁する強豪だ。

論題は「身代金の支払いを違法行為とみなす」。トップバッターは、この政策を提案する政府側の小渕圭悟さん（17）。ストップウオッチを押して、滑らかな英語で会場の270人に語りはじめた。

明快なスピーチだ。テロリストによる人質事件を前提に「論題の本質は、どちらの政策がより多くの命を救えるかだ」と話し、身代金が新たなテロの資金源になること、国際社会が結束して違法化に取り組めばテロ封じにつながることを強く訴えた。

野党側も一歩も譲らない。国民の命を守るのは国家の責務だとし、「愛する人を救おうとする個人の権利は誰にも侵せない」と反論。政府側に次々と疑義を突き付けた。

50分のディベート

日本では論題が何か月も前に示されて発言内容を入念準備する英語ディベートもある。だが、即興型は通常、試合開始15～25分前に論題が発表され、このわずかな時間で議論をまとめて試合に臨む。もちろん、インターネットを使った情報収集は認められない。

日頃から社会問題にアンテナを張り、論理的思考と英語力を鍛えないと戦えない知の格闘技だが、両校は様々な事例を引き合いに議論を展開した。

「フランスは自国民解放のためイスラム武装勢力に60億から70億円を支払ったとの情報がある」。データを示した政府側は、莫大な身代金がテロ拡大につながることを立証しようとした。

野党の鎌原舞衣さん（17）が紹介したのは、日本人ジャーナリスト人質事件で家族の出した声明だった。大切な人と引き裂かれる悲しみと苦しみを伝え、「社会は悪を罰するが、無事を願う家族の行動は『悪』ではない。どうして違法化できよう」と問いかけた。

ディベートは50分に及び、会場からは「エビデンスにエビデンスで対抗する知識がすごい」「感情に訴える英語に心を動かされた」と驚きの声があがった。

審査では「仮に違法化されたとしても……」と、相手の主張を受け入れたうえで議論を組み立てた野党側に軍配が上がった。ジャッジの一人、大学世界大会で活躍した小野暢思（みつし）さん（26）は「even ifという比較思考は大学生大会の上級戦略。ようやく日本の高校生も実践できるようになってきた」と話す。

「このテーマで真っ向勝負しても勝てない」「政府の主張を切り崩すには、どうしたらいい?」――。勝敗の鍵を握る25分の論題準備時間で、懸命に立論に取り組む渋谷教育学園渋谷高の3人。

THW criminalize the payment of ransom 本院は身代金の支払いを犯罪行為とみなす

We should never ever give in to terrorism.
Once we compromise, respond to their requirement,
that will just facilitate terrorist to take hostages.

テロには決して屈してはならない。一度でも要求をのめば、テロリストによる誘拐を助長させてしまう。

How will government justify,
neglecting and abandoning citizens?

人々の命を無視し、見捨てるのを、政府はどうやって正当化するのか?

We want to value the future.
Because if this situation keeps going on,
there will be so many killed or attacked.

我々は将来を重視している。身代金を支払う状態が続けば、テロの犠牲者は増える一方だ。

They won't just stop kidnapping the moment the
government says, "Hey guys we don't pay ransom"

「身代金は支払わない」と政府が宣言したからといって、人質事件がなくなるわけではない。

英語から逃げたくない

今回、短期間で結果を出した学校がある。決勝トーナメント進出こそ逃したものの、都大会で渋谷教育学園渋谷を破り1位となった豊島岡女子学園高（東京）だ。

1年間の米国留学から帰国した宮本麻耶さん（18）が昨年10月、海外体験ゼロの久保田葵さん（17）と杉山佑奈さん（17）に声をかけ、2人は「今ある知識で勝負できるのが面白そう」「苦手な英語から逃げたくない」とチームを結成した。

そんな3人を鍛えたのは、英会話部顧問の小林良裕教諭（37）が発案した「2分間 英語おばかスピーチ」。例えば、3人それぞれが「ピカチュウ」「ヘビ」「英語の先生」をペットにするメリットについて必死になって話し、互いに突っ込みを入れるスピーキング練習だ。

同時に力を入れたのは論題準備のための練習。毎朝20分、自分たちでテーマを決めて200近い論題をこなした。我流だが、①相手の立論を先読み②相手の主張を自らの主張に取り込み、議論を狭めながら反論を封じ込める――という手法を磨いた。

チーム結成当初、〝純ジャパニーズ〟2人の英語がなかなか理解できなかったと宮本さんは明かすが、「12月になると2人の話す英語がびっくりするほどうまくなった」。探求心と英語力アップがかみ合い、あれよあれよと都大会を勝ち抜いた。

論題練習に取り組む豊島岡女子学園高のメンバー。互いの弱みを補い、とびっきりのチームを作った。

焦らず、ゆっくり

「楽しく、でも、とことんやる」という姿勢は、どの学校も同じだ。栃木県や愛知県などは学校横断の勉強会で底上げを図る。大学ディベート部で〝武者修行〟したり、休みの日に他県の生徒と練習したりする生徒もいる。

同連盟理事でもある小林教諭は「強豪校と練習して経験を積めば、話す力、ディベートする力は飛躍的にアップする。あえて注文をつけるならば、焦らず、ゆっくり話すこと。相手に伝わる英語を大切にしてほしい」と生徒たちにエールを送った。

↑決勝戦の動画も見られます https://www.hpdu.jp/ 日本高校生パーラメンタリーディベート連盟ウェブサイト

総評

沼田 貞昭 氏
元駐カナダ大使・日本英語交流連盟会長

若いころ、半年かけて準備するディベートをやったが、実社会で議論する際にそんな時間はない。世界で求められるのは、限られた時間で論理立てて話し、相手を説得する力。書く力も大切で、そうした力の全てを鍛えてくれるのが即興ディベートだ。

普段の練習では、与えられたテーマに対して三つほどの論点を見いだし、それぞれに対する反論を用意できるようにしたい。日ごろから様々なニュースをフォローするなど時事問題の知識も欠かせない。

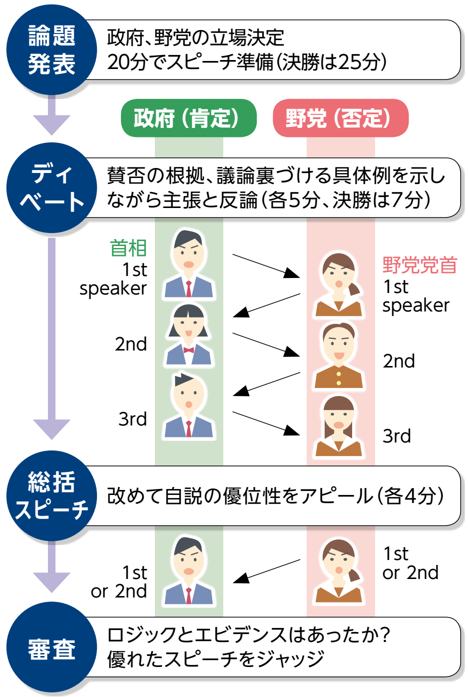
連盟杯には多くの帰国子女が参加しており、流暢に話せる人に刺激を受けながら英語を磨けるはずだ。注目したいのは、帰国子女のいないチームも過去に優勝していること。良いディベートの基準が語学だけではないことの証左だ。

即興型英語ディベートとは Parliamentary Debate

もともと、イギリス議会の答弁トレーニングとして始まった競技ディベート。高校生、大学生向けの国際大会や世界大会がある。

高校生連盟杯の流れ

試合の約20分前に論題が発表される。各3人のチームには政府（肯定）と野党（否定）の役割が与えられ、限られた時間と知識で立論することが求められる。1人4分～7分でそれぞれの主張を述べた後、質問や反論をしながらスピーチを繰り返し、どちらがジャッジを説得できるかを競う。



新聞でチャレンジ!

通信添削プログラム

作文添削教室 スタート

小・中学生を対象に、新聞記事を活用した読売新聞の「新聞でチャレンジ! 作文添削教室」が4月1日、サービスを開始した。時事問題やニュース解説などの記事を読み、記述式の設問に解答することで、読解力や自分の考えを表現する力を養う通信添削教材だ。

現代社会の様々な事象を伝える新聞は、児童生徒の視野を広げ、日本や世界を見る眼を養うには格好の教科書。新聞記事を基に作成された教材に取り組むことで、読解力や思考力、表現力などが確実に身につくはずだ。さらに、家族で記事について話し合うことで対話が弾み、コミュニケーション力の向上にもつながるだろう。

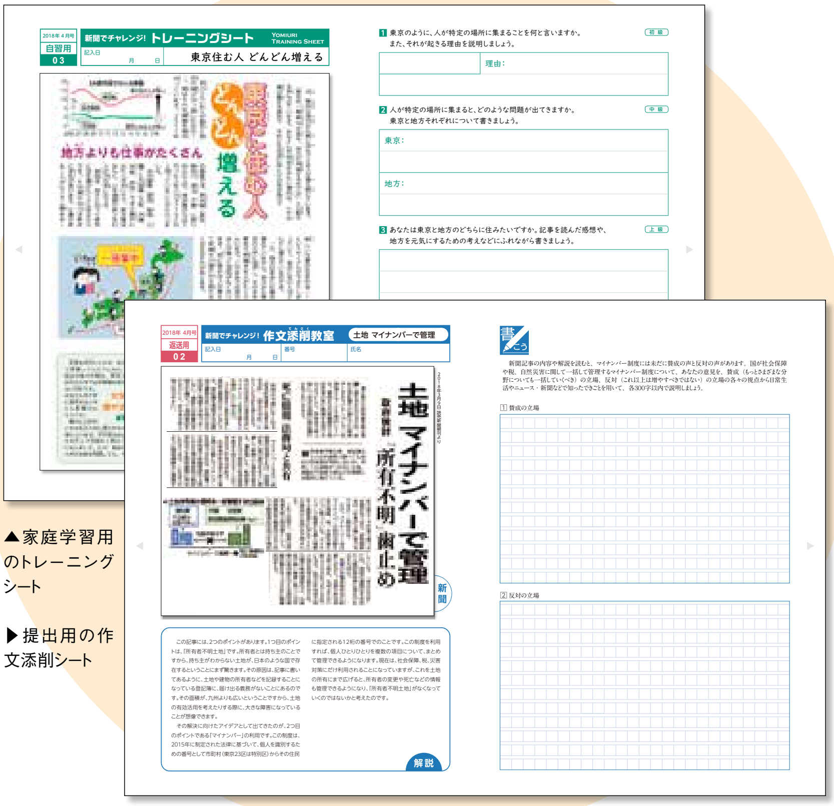
月に1回、シートが自宅へ

対象は、小学4年生から中学生。教材は、家庭学習用の「トレーニングシート」と提出用の「作文添削シート」で構成されており、読売新聞や読売中高生新聞、読売KODOMO新聞の記事を基にした出題シートが、毎月1回、自宅に郵送される。

教材が届いたら、まずは、4枚1セットのトレーニングシートでウォーミングアップ。記事を読んで、「初級」、「中級」、「上級」と学習段階に応じた設問に手書きで答えを記入し、親子で議論しながら答え合わせをする。続いて、2枚の作文添削シートに挑戦し、添削を希望する1枚を返送する。約2週間後に、やる気を引き出すコメント付きで添削されたシートが手元に戻ってくる――。これが基本的な流れだ。

動画の解説も

作文についてのウェブ動画によるポイント解説もあり、疑問点を解消しながら社会の仕組みを理解し、学力を伸ばすことができる。中学入試の社会科対策だけでなく、高校受験の時事対策・記述対策や、公立中高一貫校の適性検査対策の効果も期待できる。



▲家庭学習用のトレーニングシート

▶提出用の作文添削シート

費用（税抜き）	期間	金額
費用（税抜き）	1か月	1,600円
	6か月	9,300円（月当たり1,550円）
	1　年	17,400円（月当たり1,450円）

「新聞でチャレンジ!作文添削教室」の運営は、関西の名門中学受験に実績のある進学塾「浜学園」（本部・兵庫県西宮市）が行います。詳しくは浜学園の特設サイトをご覧ください。

http://shinbun-challenge.info/

読売新聞 教育面とウェブでスタート！

新聞を活用した学習「NIE」（エヌ・アイ・イー、Newspaper In Education）の実践を紹介する連載「楽しくNIE」が４月末から、読売新聞教育面と読売教育ネットワークのウェブサイトで同時に始まった。NIEに熱心に取り組む全国各地の先生を訪ね、授業の様子や、導入するノウハウなどを毎月1回、紹介するコーナーだ。

「夢」をテーマに、新聞から言葉を探して切り貼りする５年生（４月、八幡小で）

楽しくNIE

NIEの実践をリポート

予測不能とも言われるこれからの時代を生きていく子供たちには、学校での学びを社会と結びつけて考えられるようになることが求められている。そうした力を培うには、社会で起きているニュースを取り上げた新聞を、授業で活用することが有効だと言われている。２０００年度から本格的に始まる新しい学習指導要領の総則にも「新聞活用」が盛り込まれ、新聞を扱った教科書も増えている。しかし、「新聞をどのように授業に取り入れたらいいか分からない」との声が教育現場には多く、ＮＩＥ導入のヒントとなる実践を分かりやすくリポートする。

読売新聞教育面では、ＮＩＥに取り組む先生のコメントを顔写真入りで紹介。ウェブサイトでは、読売新聞のＮＩＥイメージキャラクター「ヤク先生」がナビゲーター役となり、授業の様子を詳しく解説する。

新聞記事を使い、１年生はすごろくまで作った

新聞タイムの作品が貼られた６年生の教室前（昨年３月）

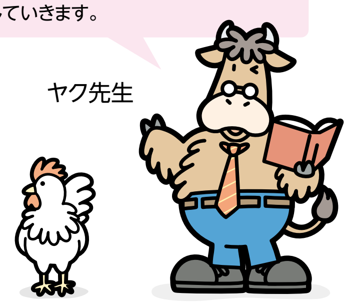
「新聞タイム」を学年ごとに紹介

第１回目に登場したのは、１年から６年まで全校を挙げてＮＩＥに取り組む東京都北区立八幡小学校。朝学習の15分間を使った「新聞タイム」（ＮＩＥタイム）の様子を学年ごとに紹介した。

新聞タイムは、新聞から気になった記事を選んで切り抜き、ワークシートに貼ってコメントをつける活動で、週に１、２回行っている。子どもたちが自主的に取り組むため、教師の負担は少ない。初めは「難しい」「めんどうくさい」と言っていた子供たちが、続けるうちに「楽しい」「やってよかった」「世界が広がった」などと口をそろえるようになるという。

ポイントは「無理せず」。そうしてコツコツと１年間続けた結果、子どもたちは自然と書く力を身につけ、学力も全学年で向上した。「低学年に新聞は難し過ぎるのでは」との声もあるが、写真や広告に注目するなどして、１、２年生でも楽しみながら取り組んでいる。新聞を教材にすることにより、教科横断型の学習に発展し、新学習指導要領で強調された「主体的・対話的で深い学び」（アクティブ・ラーニング）にもつながるという。

ヤクは、ユーラシア大陸の高地に生息する、ウシの仲間。NIEを通して、これからの社会を生き抜く上で“ヤク”立つ力が子供たちに身につくよう、ヤク先生が応援していきます。



ヤク先生

http://kyoiku.yomiuri.co.jp/torikumi/nie/tanoshiku/contents/nie1.php

イラストと記事から問題にチャレンジ

「新聞@スクール 月刊ワークシート」スタート!

「新聞@スクール 月刊ワークシート」は、ニュースについてまとめたイラストと記事を読んで、子どもたちに設問に答えてもらう月に1回の特集ページです。学校や家庭で、新聞を活用しながら、読解力や理解力を身につけることができます。

読売教育ネットワークのウェブサイトには、同ネットワークの秋山純子アドバイザーによる紙面連動の解説を掲載。ニュースについてより深く考えたり、友達や家族と話し合ったりするときに役立つ内容になっています。

初回テーマは「東京五輪」

4月に読売新聞に掲載された「月刊ワークシート」のテーマは、2020年の東京五輪でした。国際オリンピック委員会（IOC）が「若者へのアピール」と「男女平等の推進」を五輪の新しいテーマに掲げていることを受けて、東京五輪では、若い世代に人気の競技や男女が力を合わせる混合種目が加わることを記事で説明。新しい競技や種目をスタイリッシュなイラストと文章で紹介しました。

イラストの下には、イラストや記事、そしてグラフを理解したうえで答えてもらう設問コーナーがあり、この特集ページのマスコットキャラクターのアットスくんが「問題にチャレンジ!」と呼びかけています。

「月刊ワークシート」次回（5月2日紙面掲載予定）は、女性がもっと働きやすい社会にするためには何が必要かを考えます。その後も、ホットなテーマを準備していますので、ご期待ください。

テーマに沿ったインタビュー

インタビューでは、タレントの小島よしおさんがクライミングについて語っています。スポーツクライミングも、東京五輪で新たに加わる競技です。小島さんがクライミングを始めるきっかけになったエピソードを明かしています。

「新聞」に迫る連載

「新聞@スクール 月刊ワークシート」のページのもう一つの注目記事が「新聞教室」です。新聞の見出しを決めたり、レイアウトを考えたりする編成部の担当者が「新聞ってなあに」という疑問に答えます。最初は「見出し」です。見出しがない新聞ってどんな感じでしょうか。毎月、色々な角度から「新聞」に迫ります。

紙面連動のウェブサイトも

ウェブサイトのページの主役は、秋山アドバイザー（じゅんこ先生）とアットスくん。アットスくんは、新聞のスクラップが趣味のロボットです。人間世界のことを知りたくて、毎月、じゅんこ先生に、根掘り葉掘り質問します。2人が登場するウェブサイトもよろしくお願いします。

新聞@スクール 月刊 ワークシート

読売新聞朝刊に毎月掲載

解説ページ http://kyoiku.yomiuri.co.jp/shinbun/school/

編集と販売、一緒に授業

新聞@スクール

出前授業で生徒からの質問を受ける
宮本部長（右）と森支局長

聖徳大付中高の新入生に
千葉・松戸

　聖徳大付属女子中学校・高校（千葉県松戸市）の新入生が読売新聞記者らから新聞について学ぶ「出前授業」が4月13日と17日、千葉県成田市のホテルで行われた。取材現場を指揮する森昭雄千葉支局長と松戸市内の読売新聞販売店（YC）を統括する株式会社「椎名」の宮本亮一・業際事業部長が講師として出向き、編集から配達まで新聞の様々な側面について説明した。今後の学校での勉強や、生活の仕方などを学ぶ「新入生学習オリエンテーション」の一環で、中学生約40人、高校生約140人が受講した。森支局長が、「新聞の全てのページを読む必要はない。見出しだけ見て、『おもしろそう』と思えるものを見つけたら、今度はその記事を読んでほしい。一日1本でいいので、これを毎日続けてほしい」と新聞の読み方をアドバイス。

　宮本部長は動画なども使いながら新聞販売店の仕事について説明し、「外国から来て日本語を学びながら新聞配達をしている青年を含め、多数の人が読者に新聞を毎日確実に届けるため頑張っている」などと語った。

新聞をトータルで理解してもらうには
読売新聞千葉支局長　森 昭雄

　昨秋から読売新聞の取り組みとして始まった「新聞@スクール」で、私は千葉県内の小・中・高校でこれまでに30件以上の「出前授業」を行った。授業はいずれも、「新聞の読み方」「新聞記者の仕事」など、取材して記事を書く記者の視点、立場から行ったもので、学校からそうした授業の要望があったことに基づいている。

　出前授業の目的は若い世代に新聞に親しんでもらい、新聞を手にとってもらうことにある。新聞の読み方、記者の仕事などを説明することはもちろん大切だが、新聞や新聞社は販売、広告、事業など様々な分野の仕事をする人たちによって成り立っている。新聞をトータルで理解してもらい、新聞により親しんでもらううえで、編集以外の部門の人にも授業に参加してもらうことは重要だと感じた。

　実際、今回宮本部長の話のときに、自分の仕事を一生懸命日本語で説明するフィリピンやブータンから来たスタッフの動画を、生徒たちは興味深そうに見つめていた。恐らく生徒にとってはこれまであまり聞いたことのない話で、新聞への関心を持ってもらえたのではないかと思う。

　出前授業はあくまでも授業であり、就職活動の企業説明会とは異なる。学校側には、「編集分野以外に、こんな話もできる」「こういう内容でどうか」と事前にメニュー案を示し、共通理解を深めておかなければならない。

　新たな試みであり、定まった方式はないと思う。いろいろな方の意見を聞いて、より良いやり方を模索していきたい。

News

第67回読売教育賞 全13部門で募集 8月受け付け

小中高などの教員や教育関係団体・個人の優れた実践を表彰する「第67回読売教育賞」は、8月1日から22日まで応募を受け付けます。自薦、他薦は問いません。創意と工夫にあふれる教育活動や指導の実践報告をお寄せ下さい。

【募集部門】 ①国語教育 ②算数・数学教育 ③理科教育 ④社会科教育 ⑤生活科・総合学習 ⑥健康・体力づくり ⑦外国語・異文化理解 ⑧児童生徒指導 ⑨カリキュラム・学校づくり ⑩地域社会教育活動 ⑪NIE ⑫特別支援教育 ⑬音楽教育

【募集対象】 小中高校、特別支援学校、幼稚園、保育所、認定こども園、児童館、学童保育所の長および教職員、スクールカウンセラー、PTA、社会教育団体、教育委員会、博物館などの関係者

【表彰】 部門別に最優秀賞（盾と副賞50万円）、優秀賞（盾）

【募集期間】 2018年8月1日（水）～22日（水）。同日消印有効

【発表】 18年11月上旬（予定）、読売新聞紙上で

【問い合わせ】 読売教育賞事務局☎03・6739・6713

https://info.yomiuri.co.jp/contest/edu/kyoiku.html

海外で学ぶ・リレーエッセー㊵

米ニューヨーク州立大学ジェネセオ校
居場所と成長の機会を与えてくれる音楽

坂内 佑太朗さん

新潟県立国際情報高校卒、ニューヨーク州立大学ジェネセオ校（米国）2年（執筆時）

ジェネセオ室内合唱団監督のジェラード・フロリアーノ博士と声楽の練習をする坂内佑太朗さん（右）＝本人提供

ニューヨーク州立大学ジェネセオ校

1871年、ワッズワース師範訓練学校として創立され、1948年にニューヨーク州立のリベラルアーツ・カレッジとなった。学部学生数は5512人。

自由の国、そして志があればあらゆる可能性に恵まれているアメリカに魅了され、音楽という過去には無縁だった世界に飛び込んだ。それは、ジェネセオ室内合唱団入団オーディションのポスターを見つけた瞬間だった。いやいやそんなわけにはいかない。楽器を触ったこともなければ、合唱もオーケストラにも関わったことはないのだし。それに、音楽とは、幼いころからの多くの経験と練習が必要だと信じきっていた。だから、それは到底不可能に見えた。が、それは大きな過ちだった。ポスターには、経験、専攻やレベルは不問、全学生が対象、とあった。あとは、それにつられて乗ってみることにした。まさか、オーディションを受けた学生の半数が初心者だとは知らずに。

あくる日、オーディションを受けるため待合室に入ると、50人もの学生がいたことにまず驚いた。ジェラード・フロリアーノ合唱団指揮者から出された課題は、アメリカ国歌を歌うことだった！　戸惑いを隠せないまま、歌詞もメロディーもほとんど歌えず、これで終わりだ、と思った。しかし、なんて紳士的かつ情け深いのだろう！　日本からの留学生だとわかると、自分が歌える歌なら日本の歌でもいい、と言ってくれたのだ。２日後、感激して大満足することになった。そう。オーディションに合格したのだ！　室内合唱団唯一の留学生で日常会話の英語にも苦しんでいるが、確かに自分も美しいハーモニーを創造する１人だと、私は自信を持って言うことができる。そして今では、英語の歌ばかりではなく、ドイツ語、フランス語、イタリア語の歌なども歌っている。

私たち室内合唱団は、ヨーロッパの主な都市を巡る国際ツアー、また、ニューヨーク、ボストン、シカゴなどへの国内ツアーにも出かけていく。学生たちが洗練されて成長するのにこんなすばらしいやり方があるだろうか。なんとも素敵なことではないだろうか！　ジェネセオ室内合唱団に加わってすぐ、きずなの強い家族の一員であり、一人ひとりが結びついているように感じた。たとえ言葉を発しなくても歌を通して、会話、心が通じ合うと信じることができた。日々歌声を奏でるたびに、フロリアーノ指揮者と仲間たちから、鼓舞され続けている。歌い続けよう、そして音楽を通してすばらしい価値を発見しようではないかと。

（会報編集部抄訳　The Japan News　２０１７年10月26日）

RYUGAKU FELLOWSHIP

海外留学を目指す高校生に進学支援を行っているNPO法人「留学フェローシップ」のメンバーが、海外のキャンパスライフをリレー連載します。留学フェローシップの詳細はウェブサイトへ。　http://ryu-fellow.org

英語の原文はhttp://the-japan-news.com/news/article/0003987245でお読みいただけます。